

卒業後の豊かな生活を目指して
～ICT 活用を通じた情報活用能力の育成と授業づくり～
宮崎県立明星視覚支援学校

1 はじめに

今日における ICT 機器の普及と点字関連ソフトウェアの進歩により学習に有用な様々なデジタル教材が増加しており、iPad 等のアクセシビリティ機能を駆使することにより、視覚に障がいのある幼児児童生徒も利用できるようになってきた。これらを学習に活用することは、幼児児童生徒の学力を高め、個別最適な学びの実現、教員の支援を受けなくても主体的に学習できる環境を構築するための欠かせない条件になりつつある。また、卒業後の自立と社会参加に向けても ICT 活用能力が必須となってきた。

本校の実態として、幼稚部から高等部理療科まで設置されており、幼稚部 1 名、小学部 7 名、中学部 2 名、高等部普通科 2 名、本科保健理療科 1 名、専攻科理療科 3 名、専攻科保健理療科 1 名の全校幼児児童生徒数 17 名、全てが通常学級である。小学部のみ全盲児童が 4 名在籍しており、その他の幼児児童生徒は弱視となっている。令和 6 年度に大学進学した卒業生から進学により、日常的に ICT を活用してやりとりをする場面が増え、「在学中に ICT を活用できる力を身に付けておくべきだった。」という声が挙がったことから、在学中から社会参加において適応できる ICT を活用する力には至っていないことが課題として挙がった。

そこで本校では、幼児児童生徒に対して授業や学校生活の中で、幼児児童生徒一人一人の情報活用能力についてタブレット端末指導の系列表を用いて実態を把握し、課題を整理することにした。そして、今後、幼児児童生徒が情報活用能力を身に付けて、教科学習や授業において主体的・対話的で深い学びを実現し、QOL を高め豊かな人生を送るためには、指導にどのように ICT を取り入れるとよいかについて検証していきたいと考える。以上のことから、本研究主題を設定した。

2 研究の目的

(1) ICT を活用した授業に関する研究

特別支援学校の研究指定校において、ICT を効果的に活用し、一人一人の自立を目指した資質・能力の向上を図るために、各教科や職業教育、自立活動等の授業に関する研究を行う。

(2) ICT を活用した公開研究授業

特別支援学校の研究指定校において、教員の ICT を活用した実践的指導力の向上を図るため、指導方法や指導計画及び授業に関する研究成果や実践の発表等を行い、他校にモデルを示す。令和 6 年 12 月 12 日木曜日に、本校へ教育関係者を招いて研究公開を実施した。

3 研究仮説

幼児児童生徒に対して授業や学校生活の中で、幼児児童生徒一人一人の情報活用能力についてタブレット端末指導の系列表を用いて実態を把握し、課題を整理し、幼児児童生徒が情報活用能力を身に付けて、教科学習や授業において主体的・対話的で深い学びを実現することにより、卒業後の豊かな生活へつながるのではないかと考える。

(1) ICT 活用に向けての組織づくり

ICT 活用の指導においては、幼児児童生徒の知識・操作性等の実態及び変容、テクノロジーの進歩等に対応することが必要である。計画等に軌道修正の必要性が生じた場合は十分な協議を踏まえて修正を行うことが必要だと考えた。そこで本校では、PDCA の P(Plan)と D(Do)の間に「Adjust (調整する)」の A を入れて、通称 PADCA (パドカ)として対応した。研修部を窓口として、教員からの研究への要望等を随時、伝えるように共通理解を図った。

卒業後の豊かな生活を目指して ~ICT 活用を通じた情報活用能力の育成~

C 校内研究
 課題研究：学部での協議・改善・共通理解を図る研究
 基本研修：新転任者向けの視覚障がい教育についての研修
 応用研修：2年目以降教員向けの専門性向上を図る研修

実践授業、代表授業のフィードバック：一覧表への記入

D 授業の充実 授業研究(実践授業各教員2回、代表授業) 各教科等との連携
 授業以外の教育活動 休み時間等の 授業以外での利用
 校外での活動 学校外での利用 家庭生活等

ICTに関する専門性の高い教員が学部を越えて指導

自立活動の指導の充実
 情報モラルの育成
 タブレット端末指導の系列表

校内全体 学部・学年・学級 共通理解
 学校生活の中で、日常的に ICT 機器が活用できる環境整備
 保護者との面談 個別の指導計画

ICT相談チャット

明星 ICT アドバイザー ※授業研究・助言
 ICT 教育推進委員会 教務情報部

ICT 推進リーダー ※ICT に関する情報提供等

研修部 ※校内研究実施計画立案・提案
 ※「ICT に関するアンケート」の実施
 ※研修部通信による ICT 活用による QOL の向上の紹介

A 幼児児童生徒の成長等 最新のテクノロジー等に対応 **P**

【PDCA に「Adjust (調整する) を加えた PADCA (パドカ) サイクル】

(2) ICT 活用のための組織的サポート体制づくり

ア ICT 推進リーダー（2名配置）の役割

業務内容は、校内の ICT 環境の整備、校務 DX の推進を中心的に担う。具体的には、宮崎県教育委員会との連絡、各種研修、調査、システム、アカウント、ネットワーク、校務用 PC・iPad 等端末管理、幼児児童生徒用端末の管理、校内・保護者間のデジタル化の推進等である。この他、日常的な機器トラブル・操作支援等も業務である。本校では、視覚に障がいのある教員もいるため、その教員への合理的配慮としてのソフトの導入、調整等も行っている。

イ 明星 ICT アドバイザー（1名配置）の役割

業務内容は、幼児児童生徒及び職員に対して、授業・日常生活上での ICT 活用の支援を行う。授業に入って ICT のよりよい活用や改善方法等の助言を行い、日常生活に役立つソフト等の活用を支援する。また、動画コンテンツ等を作成し、共有することで専門的な知識・技術の伝達・継承にも取り組んでいく。

(3) ICT 推進リーダー、明星 ICT アドバイザーからの情報提供等

随時、最新のアプリケーションソフトウェア等の情報、研修記録、資料の提供をミライムや教員専用の Google Classroom 等を活用して行っている。視覚障がい教育に役立つ様々な情報発信に努めている。

(4) Google Chat を活用した ICT 活用に関する相談体制

各学部に「ICT 相談チャット」を開設し、本校の ICT 推進リーダー、明星 ICT アドバイザーが助言を行い、学部間ですぐに情報を共有できるようにした。

(5) ICT に関する専門性の高い教員が授業へ乗り入れての指導

視覚障がいのある方々にとって、ICT を活用することにより、生活の質が著しく向上している。今後、本校の視覚障がい教育においても、幼児児童生徒の自立と社会参加にとって有効なアプリケーションソフトウェア等を研究し系統的な指導を積み重ねていく必要があり、課題の1つに、スクリーンリーダーを必要とする幼児児童生徒における ICT 活用が挙げられる。スクリーンリーダーを必要とする幼児児童生徒に各教科等で ICT 活用を行うためには、自立活動での ICT 活用の指導と連携する必要がある。スクリーンリーダーを使用する際には、例えば、社会科の降水量の図については、点字による触図の学習で、十分な形等の知識・理解を深める必要がある。

また、教員がスクリーンリーダーやキーボード操作等の指導をしなければならないが、教員の知識等にも幅がある。

そこで、本校では、今年度から ICT 推進リーダー、明星 ICT アドバイザー、ICT に関して専門性の高い教員が、学部を越える自立活動や各教科等の学習に入り指導を行うようにした。

- ICT に関して専門性の高い教員の指導により、幼児児童生徒が PC-Talker の音量・スピードの設定、デスクトップのアイコン探し（矢印キー・フォルダ名の頭文字の活用）、画面の拡大縮小・白黒反転についてショートカットキーの操作を知ることができ、成長をみることができている。

(6) ICT 機器が日常的に使える環境整備

本校は、現在、通常学級(小学校、中学校、高等学校に準ずる教育課程に対応した教育課

程)のみの在籍であり、各教科等で ICT 活用の指導をすることは難しいため自立活動での指導が重要である。視覚障がいのある幼児児童生徒の場合、ICT 機器の操作を習得するまでには、空間認知の難しさ等もあり、かなりの時間を要する実態がある。そのため学校生活の中で、いつでも ICT が使用できる環境整備が必要であり、iPad を主体的に使えるように置き場所を配慮した。今後、家庭との連携を図り ICT を日常的に活用できるように準備するには経済的負担もあるため家庭の諸事情も踏まえながら家庭と連携を図り計画的に進める課題がある。

(7) 校内研究

ア 課題研究：ICT 研究

(ア) 令和4年度の ICT 研究（広大 UD-BOOK 協力）等を契機に、令和5年度から複数年計画で実施。

(イ) 令和6年度の九盲研発表や、ICT 事業を見据えた研究とする。

(ウ) 課題研の各学部のテーマ及び研究内容（令和5年度）

：各学部・発達の段階で付けさせたい ICT 活用能力を整理し授業実践を行う。

イ 研究計画

月	日	曜	内 容	備考
4	19	金	ICT 授業研究公開の説明（目的、年間計画等）	
5	8	木	課題研究テーマ・前年度の内容確認 代表授業の方向性検討、実施学級、教科、担当について 実践授業（代表授業以外）の方向性・内容検討	
5	15	水	【研修①】外部講師による講演 「情報活用能力を育成する授業づくり～ICT 活用を通して～」 講師 帝京平成大学 田中 良広 教授	放課後 実施
5	17	金	【研修②】視覚障害教育におけるタブレット端末の活用 グループ1：背景色調整、拡大鏡等 グループ2：VoiceOver 等	
6	5	水	課題研究を踏まえた代表授業・実践授業づくり（内容検討①） ※生徒の実態と効果的な ICT 活用の検討	六 七 月 実 践 授 業 ①
6	19	水	【研修③】PC-Talker グループ1：初期導入編 グループ2：活用編	
7	10	水	課題研究を踏まえた代表授業・実践授業づくり（内容検討②） ※生徒の実態と効果的な ICT 活用の検討	
7	24	水	代表授業づくり（内容検討③） 実践授業（代表授業以外）の方向性・内容検討・実践事例集様式の確認	
8	30	金	代表授業づくり（内容検討④） 実践授業（代表授業以外）の方向性・内容検討・実践事例集原稿作成	九 十 月 実 践 授 業 ②
9	4	水	代表授業づくり（内容検討⑤） 実践授業の実施に向けて	
10	9	水	代表授業づくり（指導案作成・検討） 実践授業の実施と結果のフィードバック（グループ内共有）	
11	13	水	代表授業づくり（指導案最終確認）	
12	4	水	公開授業に向けた準備、打ち合わせ	
12	12	木	公開授業当日	

ウ 各学部の研究内容

課題研究：ICT 研究

(ア) 令和4年度の ICT 研究（広大 UD-BOOK 協力）等を契機に、令和5年度から複数年計画で実施。

(イ) 令和6年度の九盲研発表や、ICT 事業を見据えた研究とする。

(ウ) 課題研の各学部テーマ及び研究内容（令和5年度）

：各学部・発達の段階で付けさせたい ICT 活用能力を整理し授業実践を行う。

各学部のテーマ

幼稚園・小学部 「ICT 活用のための土台づくり」

中学部 「社会を生き抜くために必要な情報活用能力を育む指導のあり方

～生徒の実態に応じた ICT 活用の実践～」

高等部普通科 「情報活用能力の現状と課題の整理」

高等部理療科 「生徒の資格取得を実現するための ICT 活用

～自主的なより深い学びを支援するサポート体制の構築に関する取組～」

研究内容

○ 小学部の取組：以下①～③の3種類のマニュアルの作成

①パソコン（PC-Talker、My Edit）、②iPad、③サピエ図書館の操作マニュアルを作成した。

図2 「iPad の操作マニュアル 一例」

1	iPad の概要	Apple 社が提供しているタブレット型コンピュータ。画面（タッチパネル）を操作して使うパソコンのようなもの。
2	iPad ができること	○日常生活の様々なシーンで活用できる。 ・文書や資料を作成する。 ・メール等を送受信する。 ・メモ、ノートをとる。 ・動画を見る。 ・録音する。 ・オンライン（ビデオ通話や Zoom 等）で連絡を取り合う。 ・スケジュールを管理する。

○ 中学部の取組：少人数化においてコミュニケーションを図る活動のなかに、ICT を取り入れ、体験的な学びの充実を目指した。

図3 「〈中学部 ICT を使用した情報活用に関する評価表 一例〉

〈中学部 ICT を使用した情報活用に関する評価表〉	
＊評価は次の4段階から選ぶ。A:できる、B:少しできる、C:あまりできない、D:できない	
○ 情報を収集・管理する力	
1 調べ学習に対して、自ら興味・関心をもって取り組むことができる。	
2 インターネット以外にも、知りたい情報を得る手段と、その検索方法を知っている。	
3 インターネットや書籍、生成 AI 等から得た情報を比較・検討し、信用できるものを自分で選ぶことができる。	

○ 高等部普通科の取組：チェックリストを用いた評価を行い、項目を絞って全教員で現状や課題について理解を図り授業に取り入れた。

図4 「高等部普通科のチェックリスト評価の内容 一例」

評価の内容
ブラウザを起動・終了することができる。
ブラウザの検索ボックスに適切なキーワードを入力することができる。
アドレスバーにアドレスを入力（または貼り付け）することができる。
目的の web サイトにアクセスできる。
目的の web サイトから必要な情報を探することができる。
収集した情報から課題を見つけ、解決に向けた活動を実現するために情報の活用の見通しを立て、実行することができる。

○ 高等部理療科の取組：生徒と教員がやりとりをしながら学習を進めていくためのツールとして、Google フォームや Google Classroom、Keynote等について、どのような形で活用していけばよいか等の検討を行った。

- 本校で作成している「タブレット端末指導の系列表」について、全校での共通の指標となるように項目等を発達の段階、生活年齢等の実態を踏まえて再度整理を行うことにした。各学部の実態等を踏まえて、さらに実態にあったものにするために加筆・修正し、幼稚部から高等部卒業後を見据えた系統的な ICT 活用の定着を目指した指導の研究を行っている。
- 令和6年度は、課題研究においてタブレット端末指導の系列表の各項目が「①【全盲】：全盲の児童生徒の項目」、「②【弱視】：弱視の児童生徒の項目」、「③【共通】：【全盲】【弱視】の共通項目」のどの障がい種に該当するかについて協議し整理をしている。

図5 「タブレット端末指導の系列表 一例」

タブレット端末指導の系列表					
基本操作の導入期	iPad に対する興味関心の向上、機器操作の楽しさを知る。【共通】 iPad の操作時の正しい姿勢【共通】 iPad のボタンの位置と役割【共通】 ①本体、ディスプレイ、音量調節、ホームボタンの場所の理解【共通】 ②本体、ディスプレイ、音量調節、ホームボタンの役割の理解【共通】 iPad の起動、終了【共通】 ①電源の場所の理解【共通】 ②電源を押して起動【共通】 ③音声指示(Siri)の理解と設定【共通】 ④電源ボタンもしくはSiriによる終了【共通】				
	文字入力	環境設定	保存・編集	印刷	文書編集
小	○ひらがなの理解【共通】 ○オンスクリーンキーボードの理解【弱視】 ○フリック入力の理解【弱視】 ○外付けキーボードの理解【全盲】 ○ローマ字の理解【共通】 ○アルファベットの理解【共通】 ※パソコン指導における入力指導に準ずる。	○VoiceOverの使用(アクセシビリティ)【全盲】 ・設定 ・起動／終了 ・スピード調整 ・ボリューム調整 ・タップの種類 ○Siri(音声指示)の使用【共通】 ○文字表示の大きさの調整【弱視】 ○色調や白黒反転の設定理解【弱視】	○ファイルの理解【共通】 ・保存したいファイル名の入力 ・保存する場所の選択/決定 ・保存したファイル名の入力/呼出	○プリンタの構造の理解【共通】 ○印刷物が出力される向き の理解【共通】 ・印刷用紙の設置 ○無線によるプリンタ接続【共通】	○メモの使用【共通】 ・アプリの起動／終了 ・メニューバーの理解 ○Pages の使用【共通】 ・アプリの起動／終了 ・メニューバーの理解 ・カーソルの位置

エ 授業研究 ICT を活用した授業内容等に関する研究

- (ア) 全教員が、実践授業を1学期(6～7月)に1回、2学期(9～10月)に1回の計2回実施。様式については、ICT 活用の記載がなされるように新たに作成した。
- (イ) 参観後の感想では、「フリーボードを使っている様子を初めて実際に拝見しました。教師と生徒がスムーズに解説し訂正できるアプリケーションソフトウェアだと分かりました。」とあるように、実践授業を行うことで、指導者の学びに加えて、視覚障がい教育に初めて携わる教員にとって実際の指導の様子、アプリケーションソフトウェアの使用を見て、幼児児童生徒の様子、反応をみる事ができた。
- (ウ) 公開授業(令和6年12月12日)は、学部代表者各1名が実施する。
- (エ) ICT 活用のアンケートの実施・集約

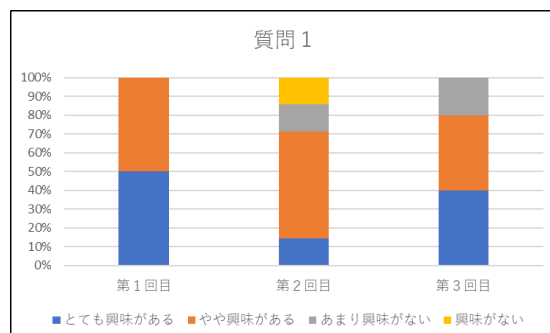
幼児児童生徒向け及び教員向けの ICT 活用アンケート調査、実践授業を受けての教員向けアンケートを実施し、幼児児童生徒の ICT 活用能力の実態把握をした上で、授業づくりを行っている。

【幼児児童生徒アンケート結果及び考察】

質問 1： パソコンに興味がありますか。

【考察】

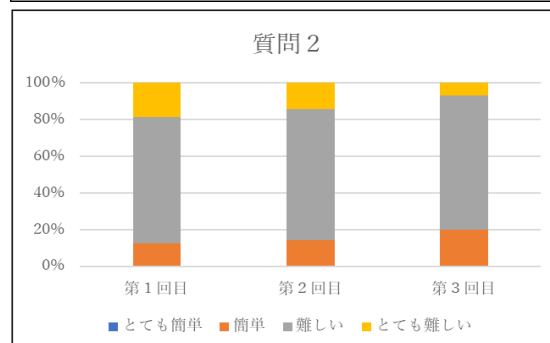
幼稚部・小学部・中学部の幼児児童生徒は、自分で機器を操作すること自体に興味・関心が高いことが結果に表れており、高等部普通科、高等部理療科の生徒の興味・関心が他学部より低いのは、日常的に使用していることもあり、興味・関心が低いことが考えられる。



質問 2： パソコンを使うのは難しいと思いますか。

【考察】

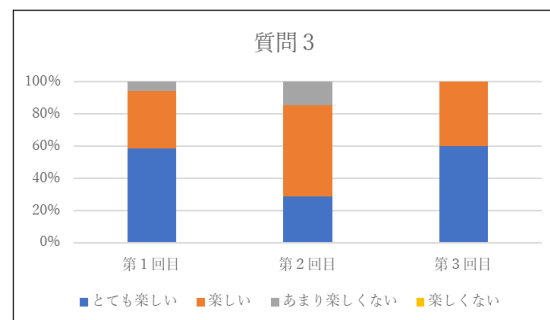
普段から使い慣れた操作方法に関しては簡単と答える幼児児童生徒もいるが、あまり使用しない様々な機能を使いこなすことに関しては、難しいと感じるようだ。



質問 3： パソコンを使った授業は楽しいですか。

【考察】

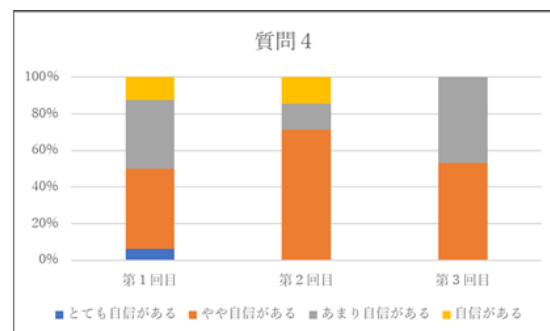
興味・関心が高いほど、とても楽しいと感じる幼児児童生徒が多いようだ。



質問 4： パソコンを使うことに自信はありますか。

【考察】

やや自信がある幼児児童生徒が増え、自信がない幼児児童生徒が減った。あまり自信がないと答えた幼児児童生徒は、知れば知るほど様々な操作方法があることがわかり、まだしっかり覚えきれていないことであまり自信がないと感じている。



質問 5： 授業で何のためにパソコンを使っているのか、考えていますか。

【考察】

時々考えている幼児児童生徒が多く、目的をもって ICT 機器を活用していることがわかる。

〈総括〉 全体として興味・関心が高く、必要性を感じ、使用している幼児児童生徒が多い。それぞれの実態で操作に対して難しさを感じている幼児児童生徒も多いため、発達の段階に応じた継続した指導が必要である。

図 6 「第 1 回実践授業を受けての教員へのアンケート集約結果 一例」

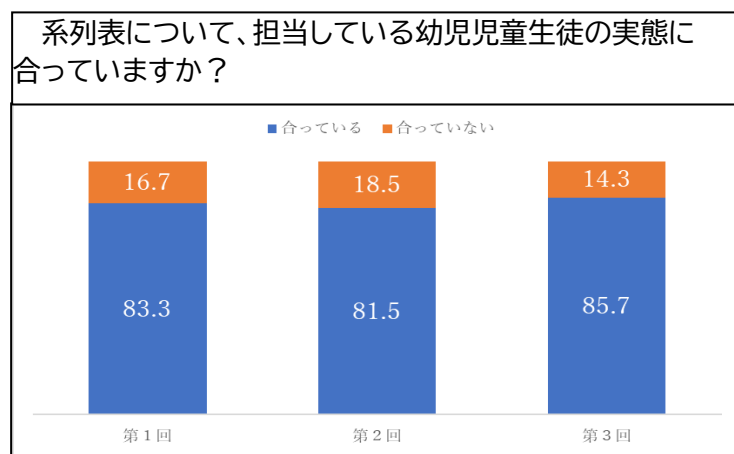


困ったことの内容

音声操作の不正確さ、練習機会の不足、リテラシー不足、認識の差、ツールの重要性、習得の難しさ、トラブル解決の難しさ、テクノロジー進歩への対応、目的に合った活用、技術的な問題、操作の理解不足、スクリーンリーダー機能の扱い、幼稚部での ICT 利用等

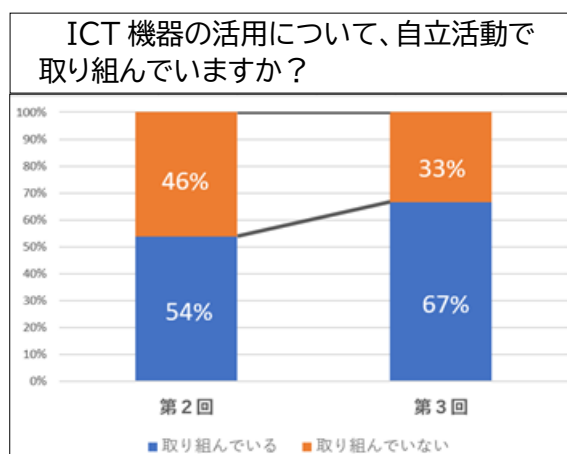
- アンケート集約結果より、教員がスクリーンリーダー等のアプリケーションソフトウェアの操作を指導することに苦慮していることが分かる。応用研修等でスクリーンリーダー等の操作研修を行っているが、各教科等でスクリーンリーダーを使って指導するには更に研修を積む必要があることも意見集約で分かった。ICT に関しては、教員が主体的に学び、日頃から利用することの必要性を実感したため、夏期休業中に ICT に関する講話・実技・オンデマンド研修を追加した。

図 7 「パソコン・タブレット端末指導系列表のアンケート集約結果 一例」



- 「パソコン・タブレット端末指導系列表」の項目について3回のアンケートを実施した。「図7」の結果より、系列表の項目は幼児児童生徒の実態に概ね合っていると考えられる。一方で児童生徒の実態に合っていないという回答もあったことから、その都度、実態に応じた見直しや検討が必要と考えられる。

図 8 「教員向けの ICT 活用アンケート集約結果 一例」



小学部・中学部・高等部普通科では、理療科教員が学級担任と連携し ICT 機器活用に取り組む自立活動の指導に当たっている。

様々な ICT に関する研修を受けたり、理療科教員と連携したりすることにより、ICT 機器を活用した自立活動に取り組む教員が増えていることが分かる。

教員からも「理療科の教員と連携することで、指導内容の精選につながり、効果は大きい。」といった回答が挙げられた。

一方で大きな変容とはなっていないのは、ICT 機器の活用に苦手意識を抱える教員もいることが考えられる。アンケートにおいて「他教科等の教員との連携が課題。」との回答もあった。このことから自立活動においては、徐々に指導の効果が見られているが、まだ教科等での取組については、今後も検討が必要であることが分かる。

(オ) 宮崎県教育委員会によるサポート

小学部4年国語科の授業について、ICT活用についてのサポートとして、宮崎県教育委員会指導主事から指導・助言を受けた。「従来の点字、触察の指導とICT活用を児童の実態に応じて効果的に実施していくことが大切である。」という助言を受けた。

(カ) 教材教具展示会

ICT を活用した公開研究授業の週に開催。令和6年 12/9(月)～12/(木)

(キ) 校内研修

a 基本研修：新転任者向けの視覚障がい教育に関する基本研修

(a) 内容に応じて拡大基本研修も並行して行う形で実施している。

ICT関係については幼児児童生徒の指導に直結する VoiceOver や PC-Talker 関連の内容についてもニーズを集約しながら行っている。

※拡大基本研修：新転任者以外の職員も対象

(b) 視覚障がい教育のイメージや研修内容等について早めに伝えるために、新任者オリエンテーション時に、「みやもう入門の配布」「図書紹介」「基本研テキストの配布」等を活用して研修を重ねている。

(c) PADCA により、新転任者の視覚障がい教育の経験や知識、ニーズを踏まえて、研修内容の変更を行い、各教員が理解を深めることができるように指導する教員も複数配置しニーズに応えるようにしている。

図9 「令和6年度 基本研修の年間計画」

期 日	内 容
3月27日(水)	新転任者へみやもう入門CD・基本研修資料配付 図書紹介
4月 2日(火)	①視覚障がい教育について 2年目以降対象
4月 3日(水)	②点字1（基本事項/分かち書き）※応用点字1：2年目以降対象
4月 4日(木)	③歩行1（手引き歩行）
4月 5日(金)	④歩行2（白杖歩行）
4月11日(木)	⑤点字2（点字編集システム/試験）※応用点字2：2年目以降対象
4月30日(火)	⑥点字3（点字コンテスト） ※拡大
6月19日(水)	⑦教育機器1（情報教育関係）
6月26日(水)	⑧眼疾
7月23日(火)	⑨弱視教育
7月24日(水)	⑩進路

b 応用研修 2年目以降教員向けの専門性向上を図る OJT を生かした研修

本校2年以上在籍する全教員で、これまでの研修の成果を発揮する場として、応用研修で、教員間で教え合いながら、指導に活用できる ICT 機器の操作方法の動画を制作した。教員が相互に教え合うことにより、個々の専門性向上を図り、今後の研究・修養の教材として自由に閲覧できるようにした。

図 10 「研修で本校教員が制作した動画 一例」

障がいの状態等	作成した動画のタイトル
弱視向け	拡大鏡 画面表示とテキストサイズ ズーム機能
全盲向け	3 本指操作 1 1 本指ジェスチャ VoiceOver の設定 2 本指操作 VoiceOver 補足動画
その他	iPad 画面収録方法 Siri の設定（例）

- c ICT 推進委員会所管の夏期休業中の校内教員研修の実施・内容
- 講話 視覚障がい教育における ICT 活用の意義 講師：明星 ICTアドバイザー
- 講話 全盲の幼児児童生徒への指導：データ活用 ICT 活用の視点 講師：ICT 推進リーダー
- 実技研修 「全盲幼児児童生徒への VoiceOver の指導」
- 「NHK ラーニング NHK ACADEMIA」オンデマンド研修
- 「生きるヒントが、ここに。」 浅川智恵子氏（日本科学未来館館長）
- 講話により知識理解、実技研修に体験を通して、ICT 活用については、当事者意識をもつことが重要であること等の共通理解を図ることができた。

5 成果と課題

（ア）成果

今回それまで教員個人では触れてこなかった教材やツールを知ることによって、学校全体で情報を広く共有し、新たな視点からの指導への活用についても話し合うことができた。また、どのような教材や指導方法がより効果的かを話し合う過程において、個々の幼児児童生徒の現在の見え方、補助具やタブレットの使用状況を詳細に把握することにより、教科・科目の担当者以外でも細かな情報を共有することができた。

（イ）課題

教員が様々な教材やツールの存在について情報を共有することができたので、次の段階としてはそれらを実際に活用するスキルアップが求められる。ICT について教員間で指導力の差があるため、それぞれがお互いを補い合う体制を作っていかなければならない。

6 まとめ

全校で共通の指標となるパソコン及びタブレット端末指導の系列表の整理を行い、卒業後の自立と社会参加に向けて、情報モラルの育成も含めて、実態に合わせた ICT 活用の系統的な指導を目指していく。ICT の操作方法を指導することだけが目的とならないように、各教科等の学びを深めるための ICT 活用の目的を明らかにし、個別の指導計画にも ICT を用いた指導場面を記載する。

今後、幼児児童生徒が、主体的に探究し課題解決を行う能力を身に付け、卒業後の豊かな生活を目指すために ICT 活用を通じた情報活用能力の育成における指導についての研究を継続していく。

最後に、本校教員が従来から受け継いできた視覚障がい教育の専門性ととともに、ICT 活用の実践的指導力の向上を図り、指導方法や指導計画及び授業に関する研究成果等を視覚障がい教育関係者へ発信することを目指していきたいと考える。